

前方後円墳秩序の成立と展開～古墳時代前半期の政治秩序の解明～ 要 旨

澤田 秀実

本論では、基礎的な研究として前方後円墳の築造企画を中心とした遺構、遺物研究による編年と暦年代の比定をおこない、考古学的知見から弥生時代末から古墳時代にかけての前方後円墳成立過程の解明に努め、その評価として国家秩序の形成と実相を考察した。

前方後円墳の成立過程は、竪穴式石槨と前方後円墳築造企画の変遷、三角縁神獸鏡の製作動向から明らかにし、あわせて三角縁神獸鏡の製作年代から前方後円墳成立期の暦年代観を確認した。また古墳築造の論理や定式化した前方後円墳の持つ政治秩序の実態を築造企画の配布から読みとり、美作地方の首長墳系列を事例に畿内政権と関わりやその構造についても論じ、前方後円墳秩序の構造的な理解に努めた。そして、前方後円墳の墳形、系列秩序、領域支配は、古墳時代の政権構造の特質を反映しており、これによって分節的で二重構造を持つ畿内政権と地域権力との在り方、さらにその史的背景や畿内政権内部における二系列の権力実態を把握した。

そして、前方後円墳は支配者の威勢をあらわすモニュメントで、祖霊祭祀の共有のための重要な装置として生み出され、畿内政権の頂点に立つ倭国王の墳墓である前方後円墳になって築造され、一定の約束事にしたがった埋葬祭祀の執行を通じて畿内政権の枠組みへの参画と、そこでの地位を示す身分表示システムであったことを示した。政権との関係は、基本的に一代限りで、模倣すべき歴代の倭国王墓の新たな築造企画と祭式の制御によって畿内政権が求心力を維持していた。また、このような身分表示システムは地域首長と小首長のあいだにも敷設されるが、こうして汎列島規模にわたる前方後円墳の共有が実現し、そこに中央と地方の関係が固定化して倭国王を筆頭とする序列関係が形成、機能し、政権構造が強大化していった。さらに、この政権構造の強大化を示す転換が、列島各地の首長墳系列の統合、小首長墳の築造を停止させた中期の変動と考えた。この中期の小首長墳の極端な減少は陸路の整備といった観点からみれば、前期の造墓活動に費やした労力の公益性の高い社会基盤整備への転嫁ともみられ、地方支配の完成と政権構造の強大化に伴う政策転換とも考えた。

最後に前方後円墳秩序の果たした国家形成過程における役割やその評価について触れ、これまで接点がなかった文献史学における邪馬台国時代と考古学における古墳時代との関係についても言及し、考古学的研究から歴史叙述を試みた。その意味で、本論のひとつの意図は古墳時代開始期の暦年代を明らかにし、文献史学による研究成果との接続にあるが、史料による「倭国王」の起点と最古式前方後円墳との同一性を確認し、倭国政権の構造性と特質を示した。結論的には、①中央政権の存在、②地域集団の序列化にみる身分秩序の存在、③東北日本南部から九州島に至る汎列島的な地域集団の掌握による領域支配の確立、④古墳の築造、水路、陸路の確保にみる土木技術の保有と政策としての公共事業の展開など、国家秩序としての身分秩序、領域支配、社会基盤整備の存在を確認した。そして、倭国は成立当初より内政秩序として身分秩序、領域支配、社会基盤整備（インフラ投下）能力を備え、加えて外交交渉能力や外交政策も持ち、文明国の外縁に位置したとはいえ、独立した国家としての枠組みや基本機能を持ち合わせていたと論じた。